

トピックス

献体と歯学教育

奥羽大学歯学部生体構造学講座口腔解剖学分野 宇佐美品信

近年、我が国では献体希望者が増えているとのこと。献体とは「医科大学・歯科大学における人体解剖学実習の教材として、自分の遺体を無条件・無報酬で提供すること」である。しかし、多くの国では献体の不足により、人体を用いた解剖実習が行えない状態になっているという。アメリカでの解剖実習に関するアンケート調査の結果では、回答した89校のうち12.4%の11校で、引取者のないご遺体を用いていると回答している。しかし、多くの担当者は解剖実習に引取者のないご遺体を用いることを倫理的にも学生に伝えるべきであると考えている¹⁾。我が国でも過去に献体の認識が十分に広がらずに、献体数が不足していた時代もある。そこで、医学及び歯学の教育のための献体に関する法律（献体法）が昭和58年に制定された。そのような社会的な活動の結果、本学の解剖実習も生前から献体を希望されて白菊会に登録していた方のご遺体で実習をさせていただいている。

献体の不足しているアジアの各国で、献体者のご家族との交流や式典を開催して献体者に感謝を示す「The silent mentor program」が行われ献体登録が増え始めているという²⁾。わが国では各大学で献体者への感謝を示すために毎年「慰霊式」を行っている。本学でも学生ボランティアに慰霊式のお手伝いをしてもらい白菊会会員との交流が行われている。人生最後のボランティアである献体の受け取り方は時代とともに変化していくものであると思う。近年は国内での死生観の変化が取り沙汰されることが多い。超高齢社会、核家族化の進行など理由は様々であろうが、献体という社会貢献に対して希望者が増えるということは、これまでの啓蒙活動によるところも大きいと思う。

毎年、解剖学実習を終えた学生には感想文を全員に提出してもらっている。最初の実習が始まるまでの気持ちの高ぶり、恐れなどが散見されるが、実際に解剖実習を行うと献体の遺志について考え、

熱心の実習を行えるようになったという記載が少なくない。文献においても、解剖実習は知識だけでなく、専門職としての発達を助けるとともに、「死」というものを受け入れる一助となると考察している³⁾。理学療法の教育現場において、卒業時の学習動機づけが、他者から強制されるから勉強するという外的調整による学生は、学習内容に興味を感じる内発的動機付けの学生と異なり成績が悪かったとの報告がある⁴⁾。目的をもって入学してきた学生が、解剖学実習で献体の遺志を受け止め、社会への感謝と責任を自覚し、真摯な気持ちで学習を行うようになることもプロフェッショナルとしての歯科医師の育成に欠かせない教育であると考えている。

文 献

- 1) Caplan, L. and Decamp, M. : Of discomfort and disagreement : Unclaimed bodies in anatomy laboratories at United States medical schools. *Anat. Sci. Educ.* E pub. ahead. 2018.
- 2) Saw, A. : A new approach to body donation for medical education : The Silent Mentor Programme. *Malays Orthop J.* **12** ; 68-72 2018.
- 3) Flack, NAMS. and Nicholson, HD. : What do medical students learn from dissection? *Anat Sci Educ.* **11** ; 325-35 2018.
- 4) 成田亜希 : 高等教育機関による成績不振者の発見と対応の検討. *理学療法科学* **33** ; 33-37 2018.